

論文

政治演説の中のストーリー： ヒラリー・クリントン（2008）とサラ・ペイリン（2008） のスピーチ分析

竹野谷みゆき

Abstract

The present study starts with a descriptive analysis of the manuscripts of the speeches delivered by Hillary Clinton in 2008 when she ran as a presidential candidate of the Democratic Party, and Sarah Palin, as a candidate of the vice president of the Republican Party based on the structure and the contents of each message. The results revealed that both manuscripts were composed of five sections including an introduction, three main parts, and a conclusion. The study also analyzed the five stories found in the speeches of both candidates and categorized them into three groups: one personal story, two historical stories, and two stories from a third party. These stories were analyzed from the point of view of structure and function using the analytical framework proposed by Labov (1972). The analysis revealed that the personal stories were narrated in chronological order and the details of the event were provided. Historical stories used in the speeches provided the names of the famous historical persons and some keywords related to the historical events, but the details of the historical events were not provided in the speeches. Rather, evaluation comments were provided by the speaker in order to explain how the historical stories were related to the main points of the speeches. In narrating the stories of the third party, the main information of the plot was used to explain the lesson from the story, but the details were not given.

Keywords: political discourse, narrative analysis, Hillary Clinton, Sarah Palin, historical story, personal story

1.0 はじめに

社会の中の言語行動を分析した社会言語学者のラボブは、体験談のストーリーがどのように語られるかを分析し、その構造と機能の特徴を指摘した。それは主に、個人の体験談を語る際のストーリーの構造と機能の特徴であった。本研究では、アメリカ大統領選の候補者たちのスピーチの中において、様々なストーリーが語られる点に注目し、その種類や構造と機能の特徴を大統領候補者間の類似点と相違点に注目して分析した。その結果、三種類のストーリーが観察され、それは、スピーカー本人の個人的体験を語るストーリーに加え、国家の歴史のストーリー、そして、国民の体験を語るストーリーの合計三種類であったことが判明した。歴史のストーリーや国民の体験談（第三者のストーリー）にラボブ（1972）が提唱した、個人的体験のストーリーの構造と機能の分析を施すと、どのような特徴が見られるだろうか。本論文では、その様子を明らかにすることを目的とする。

アメリカの大統領選挙は4年ごとに行われる。共和党と民主党という二大政党の候補者たちを中心に選挙戦が展開されるが、2008年の大統領選挙戦では、共和党からジョン・マケイン候補とサラ・ペイリン副大統領候補が選出された。一方、民主党からは、バラク・オバマ大統領候補とジョー・バイデン副大統領候補が選出された。それ以前の2000年から8年間に亘り、ブッシュ大統領のリーダーシップによる共和党の政権が続いたため、それに辟易した民主党から初のアフリカ系アメリカ人候補であるバラク・オバマと初の女性大統領候補であるヒラリー・クリントン氏が立候補し、接戦でオバマ候補が民主党の代表として選出されたという、話題の多い選挙戦であった。

本研究では、このエポック・メイキングな2008年アメリカ大統領選に出馬した候補者たちのスピーチを分析することにより、その中で前述の3種類のストーリーがどのように語られたのか、また、所属政党あるいは政治家により違いがあるのか、あるとすればどのような違いなのかを明らか

にすることにより、ストーリーがどのように政治のスピーチの中で語られるのか、その役割は何なのか、を明らかにする。分析対象としたのは、民主党の大統領候補者であったヒラリー・クリントンの民主党大会での2008年のスピーチと共和党の副大統領候補者であるサラ・ペイリンの同年のスピーチの原稿と動画である。スピーチ原稿と動画はC-SPANのアーカイブから入手した。スピーチ原稿と動画の長さは以下のとおり、クリントン候補の方が短いスピーチになっている。

表 1：候補者二人のデータ

候補者名	政党	選挙	原稿 (ワード)	動画
ヒラリー・クリントン	民主党	大統領候補 予備選	2,279	22分55秒
サラ・ペイリン	共和党	副大統領候補 最終戦	2,956	36分30秒

スピーチの原稿を話し始めてからの長さも、クリントン候補の方が10分以上も短い。その違いは、クリントン候補が予備選で敗退した候補者であるのに対し、ペイリン候補が最終戦の副大統領候補だからかもしれない。その証拠に、この年の民主党の副大統領候補のバイデン氏のスピーチも35分程度であり、ペイリン氏のスピーチの長さに近い。

2.0 スピーチの構成分析

2.1 ヒラリー・クリントンのスピーチ

まずは、クリントンとペイリンの両氏によるスピーチの原稿自体の構造と内容の分析を行う。ヒラリー・クリントン候補によるこのスピーチの構造を分析すると、表 2 のように 5 部に分かれている。第 1 部は「敗北の表明」、第 2 部は「立候補の理由」、第 3 部は「オバマ候補の強み」、

第4部は「共和党政権の問題点」、第5部で最後が「解決策」である。

このスピーチ自体は、2008年8月25日火曜日から28日金曜日まで開催されたコロラド州デンバー市での民主党大会でのスピーチである。この時に、クリントン候補はすでに民主党予備選挙でのオバマ候補への敗北が決まっており、それを受け入れるスピーチが期待されていた。8月27日まさにこの日に、クリントン候補は自分の負けを受け入れ、民主党候補であるオバマ氏を支持するスピーチを行った。このスピーチの第1部で、クリントン候補は民主党の候補者がバラク・オバマであることを宣言している。具体的には、最初に以下のような表現を使ってその様子を説明している。

I am honoured to be here tonight.

A proud mother. A proud Democrat. A proud American.

And a proud supporter of Barack Obama.

私は今日ここにいることに誇りを感じている。

母親として、民主党員として、アメリカ国民として、

誇りを持ってバラク・オバマを支持する。

ここでクリントン候補は、オバマ候補のライバルとしてではなく、支持者としてステージに立っており、それを誇りとしていることを公言している。それは、母親として、民主党員として、アメリカ国民として誇りであると同時に、オバマ氏を支持することに誇りを感じていると述べている。クリントン氏は繰り返して、「Barack Obama is my candidate. And he must be our president (バラク・オバマは私が支持する候補者である。そして、彼が我々の大統領でなければならない)」と訴えている。

続いて、第2部「立候補の理由」では、自分の支持者達に向けて、クリントン候補が大統領選に立候補した理由を説明している。それはまず、環境問題であり、またエネルギー問題でもある地球温暖化を阻止するため

表 2：ヒラリー・クリントンによるスピーチの構成と内容

部分 (経過時間)	構成	語数	要旨
1	敗北の表明	477	Barack Obama is my candidate. And he must be our president. (バラク・オバマは私の候補者である。そして、彼は我々の大統領でなくてはならない。)
2	立候補の理由	536	I ran to stand up for all those who have been invisible to their government for eight long years. Those are the reasons I support Barack Obama. And those are the reasons you should too. (私は、8 年間に亘り、共和党政治にとって見えない存在だった人々のために立ち上がるために立候補した。これが私がバラク・オバマを支持する理由の数々である。そして、これが皆さんにとってもその理由であるはずである。)
3	オバマ候補の強み	518	We need to elect Barack Obama. (我々はバラク・オバマを選出しなければならない。)
4	共和党政権の問題点	400	We don't need four more years ... of the last eight years. (過去 8 年間と同じ 4 年間で更に続ける必要はない。)
5	解決策	348	How do we give this country back to them? By following the example of a brave New Yorker, a woman who risked her life to shepherd slaves along the Underground Railroad. (どのようにこの国を取り戻すのであろうか。それは、勇敢なニューヨーク出身者であり、自分の生命を危険に晒しながらも奴隷達を救済に導いた一人の女性の例を辿ることによって可能になるのである。)

の政策であった。次に教育制度の向上、移民政策、政治の私物化を防ぐこと、そして、世界におけるアメリカの評価低下を阻止すること、イランとイラクからアメリカ軍を引き上げることであり、何よりも共和党政権の 8 年間で不可視的存在になってしまった人々のために立ち上がりたかったのだと、説明している。

第 3 部の「オバマ候補の強み」では、クリントン候補はオバマ候補がどれだけ大統領として適任であるかを詳しく説明している。その理由に挙げたのが、次の 3 つの状況である。一つめは、雇用が海外に流失しまっている状況の中で、エネルギー政策を講じないで世界経済の競争に勝つことはできないことであり、二つ目は、環境に優しい経済を構築するための新しい技術に投資することなしに地球温暖化の問題を解決することはできない状況であった。三つ目は、中間層の力とバイタリティーがあってこそアメリカの底力が発揮できること、だという。それに対応する形で、オバマ氏の強みを説明しており、それも 3 つ挙げている。まず、オバマ氏が世界経済のために居場所を失った人々のために政治の世界に入ったことであり、次に、ある一部の人々のための政治でなく、国民全体のための政治であることを目指していることを挙げている。最後に経済を活性化させることができることを指摘している。特にエネルギー問題に対応し、環境に優しい仕事を創出し、中間層の家庭が暮らしやすい政策を打ち出すこと、そして、社会保障制度の改革を理由に挙げている。

第 4 部のテーマは共和党政権の問題点であり、経済の停滞、エネルギー政策の失敗、雇用の海外流失、中間層家庭の逼迫をもたらしたこと、という 4 つを挙げている。2000 年からの 8 年間に亘ったブッシュ政権に触れて、「…we don't need four more years ... of the last eight years. (過去 8 年間をあと 4 年間も継続する必要はない)」と表現している。更には、以下のようにも主張している。

America is still around after 232 years because we have risen to the challenge of every new time, changing to be faithful to our values of equal opportunity for all and the common good.

アメリカは建国以来232年しか経っていない。我々は新しい時代の挑戦に立ち上がってきた。そして、全ての人に均等の機会を与えろという我々の価値観に忠実になるべく変わり続けている。

ここでは、アメリカが国家としてまだ232年の歴史しかないことに触れ、建国当時の精神を思い出し、国民全体の平等と公共の精神に立ち返ることを示唆している。

第5部は「おわりに」に位置づくが、ここでは解決策を提案している。その策は、「How do we give this country back to them? (この国をどのように国民の手に戻すのか?)」という問いに対する答えとして、提案している。その答えは、「By following the example of a brave New Yorker, a woman who risked her life to shepherd slaves along the Underground Railroad. (勇敢なニューヨーク州民の一人であり、地下鉄道に沿って命を賭けて奴隷たちを導いた一人の女性の例に倣うことによって実現する)」と応答することにより、歴史のストーリーが展開することになる。ここでは、奴隷を救うために勇敢に戦ったHarriet Tubmanを例に出しており、そのメッセージは、Keep Going (進み続けること) であり、それこそがアメリカ国民の価値観であり、今回の選挙でもやり続けること (候補がオバマ氏になっても、大統領戦に勝利するよう努力しつづけること) を提唱している。この第5部はスピーチ全体の終結部になっており、終結部の中心はタブマンが犬に追われても、森の中で追手の松明の光を見ても、恐れることなく前に進み続けたストーリーを語るることにより、その勇敢な行為を称えとともに、現代の国民に解決策の具体例を示してスピーチを締め括っている。

以上のとおり、このスピーチは 5 部構成になっており、民主党内の結束を呼びかけ、クリントン候補の敗北のあとも民主党員が一丸となってオバマ氏を支持して戦い続け、共和党から政権を取り戻すことを呼びかけている。

2.2 サラ・ペイリンのスピーチ

次に、共和党の副大統領候補であるサラ・ペイリン氏のスピーチを分析する。このスピーチは、2008年9月4日（水）にミネソタ州セントポール市で開催された共和党大会で行われたものであり、このスピーチの目的は副大統領候補の指名を受け入れることであった。

ペイリン候補のスピーチも同じく、表 3 のように 5 部に分けられる。第 1 部は「指名の受諾」、第 2 部は「生い立ち」、第 3 部は「信条」、第 4 部は「抱負」、第 5 部で最後が「マケイン候補の強み」である。まず、第 1 部の「指名の受諾」の構成と内容を分析しよう。この部分で、ペイリン候補は、まず初めに副大統領候補の指名を受け入れることを宣言している。そして、共和党大統領候補のジョン・マケイン氏の業績を称えている。特に、22年間に亘り、従軍してきたことを指摘し、兵士の母親の立場としてどれだけジョン・マケインのような指揮官が適切かを述べている。

それに続けて、ペイリン自身の家族の紹介を始める。19歳になる息子の名前トラックで、陸軍歩兵として 1 週間以内にイラクに配備される予定だということ、また、いとこのケイシーも徴兵され、ペルシャ湾の空母に勤務していることを明らかにしている。また、子供が 5 人（息子二人、娘三人）いて、それぞれの名前を出して、小さな紆余曲折がありながらも、家族の関係が安定していることをアピールしている。夫のトッドはアラスカ州で漁師をしており、また油田で機械を操作する仕事に従事しており、アメリカ鉄鋼業組合の組合員であることに誇りを持っている人である。夫のトッドはエスキモーの子孫で高校の時に相逢ったが、それから20年後の

表 3 : サラ・ペイリンによるスピーチの構成と内容

部分	構成	語数	要旨
1	指名の受諾	625	I will be honored to accept your nomination for vice president of the United States. (アメリカ副大統領への推薦を受け入れることを誇りに思う。)
2	生い立ち	494	I had the privilege of living most of my life in a small town. I was just your average hockey mom and signed up for the PTA. (悦ばしいことに、私はこれまでの人生のほとんどを小さな町で暮らしてきた。私はただの平均的なホッケーママでPTAの活動に参加した。)
3	信条	635	..., but we are expected to govern with integrity, and goodwill, and clear convictions, and a servant's heart. And I pledge to all Americans that I will carry myself in this spirit as vice president of the United States. (威厳、善意、明確な信念、仕える精神を持って政治に携わる。アメリカ副大統領としてこの精神で働くことを全アメリカ国民に誓う。)
4	抱負	601	..., and then there are those, like John McCain, who use their careers to promote change. (ジョン・マケインのように自分のキャリアを利用して変革を起こす人がいる。)
5	マケイン候補の強み	601	Our nominee doesn't run with the Washington herd. He's a man who's there to serve his country and not just his party, a leader who's not looking for a fight, but sure isn't afraid of one, either. (我が党の候補者はワシントンの群で選挙戦を戦わない。彼は国に仕えるためにいてくれるのであって、党のためではない。喧嘩の種を探しているリーダーではないけれども、戦うことを恐れている訳でもない。)

今、子供が 5 人生まれた今でも、二人の関係がまだうまくいっていることも公言している。

ペイリン氏の両親は今も健在で、小さな町の小学校教師だったが、彼らから学んだことは、アメリカでは女性がすべての可能性の扉を通過することができるということだったという。両親はこの共和党大会の場に来ており、二人の名前を出して紹介している。このようにスピーチの最初で、アラスカ州でどのような家庭生活を送っているかを詳細に説明していることが分かる。

第 2 部では、ペイリン氏の生い立ちと政治家になるまでの経緯が語られている。冒頭の部分で、第二次世界大戦終了時の大統領だったハリー・トルーマンの例を出して、彼がミズーリ州の小さな町の出身であり、農業と小間物屋をしていた人物が「異例の経路で」副大統領選に出馬することになったことを紹介している。小さな町では善良な人材が正直で、誠実で、威厳を持って成長することに触れて、ペイリン氏自身の例になぞらえている。善良な人々が農業に従事し、工場を運営し、戦地で戦っていると述べており、ペイリン自身がホッケー少年の母親として普通の生活をしていることを紹介している。

そのような普通の生活からPTAの活動に参加し、市議会に関わり、市長になり、そしてアラスカ州の知事になった経緯を説明している。この中で、小さい町の平均的な母親だった自分を取り巻く人々をworking people（働く人々）と呼んでいる。また、このような人々をワシントンにいる政治家は陰で「宗教と銃にしがみつく」と批判することがあることを指摘しており、自分がまだワシントンの政治家に属していないことを示している。この第 2 部の最後でペイリン氏は、国家レベルの政治に関わる姿勢として、「The right reason is to challenge the status quo, to serve the common good, and to leave this nation better than we found it.」と述べており、正しい理由は現状に挑戦すること、公益に資すること、よりよい国家に導くことであること

であり、ワシントンでの駆け引きではないということを強調している。

第3部では、政治家としての信条が語られる。まず、冒頭部分で、自分の副大統領としての誓いを立てている。具体的には、以下のような表現で、自分の副大統領としての姿勢を公約している。

...we are expected to govern with integrity, and goodwill, and clear convictions, and a servant's heart. I pledge to all Americans that I will carry myself in this spirit as vice president of the United States.

威厳、善意、明確な信念、仕える精神を持って政治に携わる。アメリカ副大統領としてこの精神で働くことを全アメリカ国民に誓う。

それに続いて、共和党の政策で批判的になっている点について触れ、特にガス料金の高騰について弁明している。まず、石油供給会社の圧力に負けず、独占を許さないこと、パイプラインを建設するインフラ計画を実行すること、これにより外国からの輸入に頼らずに石油を供給できること、を例に挙げ、アメリカがエネルギー政策において独立した決断ができることをアピールしている。ペイリン氏は、石油の掘削でエネルギー問題のすべてを解決できるわけではないことを認めているが、かと言って、なにもしないよりはましであり、共和党は策を講じていることを訴えている。

第4部では、政策と抱負がテーマとなっている。民主党から指摘されているエネルギー政策問題と雇用創出課題に触れて、パイプラインの設置、原子力発電所の更なる開設、太陽光発電、風力発電等の利用を計画していることを発表し、共和党のエネルギー政策をアピールしている。また、同時に固有名詞は出さないものの、民主党大統領候補のオバマ氏がスピーチは上手いが、実際は法案を一つも通過させていないことを指摘し、民主党のテロ対策、増税の可能性、政府が大きくなることに懸念を示している。その懸念を払拭するためには、共和党の大統領候補マケイン氏を当選させ

る必要があることを強調している。

第 5 部は、このスピーチ全体の終結部になっている。ここでペイリン氏はマケインの業績と強みを改めて紹介している。国民のために戦えるのはマケインであり、民主党のオバマとバイデンではないことを強調している。ベトナム戦争に従軍し、ハノイの狭い独房で捕虜生活を送った勇敢な体験に再度触れて、それはオーバルオフィス（大統領執務室）でも発揮されることを指摘している。最後は、マケインと同時期に捕虜生活を送ったオハイオ出身のトム・モウの回顧記録の引用で終わらせている。毎日、厳しい尋問を受けても決して屈しなかったマケインが一緒だったお陰で、捕虜生活を乗り越えることができたという言葉でスピーチを締め括っている。このように、ペイリン氏のスピーチは、母親であるという立場を強調したり、出身州であるアラスカ州（クリントン氏はニューヨーク州）をアピールするという点では共通項があるものの、ワシントンでは新人である点や小さな町の出身であることを強調したり、戦争を支持するという点でクリントン氏と大きく違っている様子が分かる。

3.0 3 種類のストーリー

民主党候補のクリントン氏と共和党候補のペイリン氏のスピーチを分析すると、3 種類のストーリーが使われているのがわかる。まず、個人の体験談（個人のストーリー）で、これはスピーカー自身が体験したこと、達成したこと、努力したこと、自分のプロフィールを語るという形で行われる。次に、アメリカの歴史上の出来事や偉人の逸話をスピーチに組み込む方法（歴史のストーリー）がある。そして、三つ目が第三者の体験談を援用して、スピーチの中で用いる方法（第三者のストーリー）である。両候補のスピーチのどちらにも 3 種類が用いられている。

ストーリーの分析においては、両氏のスピーチから抜き出した、例 1 から例 5 の合計 5 種類のストーリーを分析対象とする。例 1 は、ペイ

リン候補のスピーチの中で用いられていた個人のストーリーであり、例 2 は、クリントン候補のスピーチで用いられたアフリカ系アメリカ人女性のハリエット・タブマンについての歴史のストーリーである。例 3 は、ペイリン候補のスピーチで用いられた、ハリー・トルーマンについての歴史のストーリーである。例 4 は、ペイリン候補が用いていた、第三者のストーリーである。最後の例 5 では、クリントン候補が自分の体験談を語る中で、3 名の第三者のストーリーを語っており、自分のストーリーと第三者のストーリーが複雑に織り込まれて、奥深いストーリーに展開している様子を示す。

3.1 個人の体験談

まずは、個人のストーリーが政治演説の中でどのように語られるかを見ていこう。例 1 は、ペイリン氏の個人のストーリーの原文と和訳であるが、これはスピーチの第 2 部で彼女が政治家としてどのような経路を辿ってこの大統領選挙の候補者になるに至ったかを語っている部分であり、政治家としての自己紹介の役割も果たしている。ペイリン候補は、アラスカ州の小さな町で生まれ、普通の母親だったことを告げている。ここでは、主婦 (house wife) とは言わず、母親 (mom) と表現している。普通の母親だった彼女はまず、子供の通う学校を良いものにしたいと、PTA活動に参加したという。そこで組織の中で働くことを覚え、次には、市議会に立候補した。その経験をもとに、次にはアラスカ州の知事に立候補したという。その結論として、小さい町では、市長候補も選挙人も知り合いで誰がどのような人かが分かるため、どのような候補が適任だと考えるかについて自論を述べる。小さい町の労働者のことを褒めておきながら、影では宗教や銃に頼っていることを悪く言ったり、スクラントンのような経済的困窮地域で発言することと、富裕層の多いIT企業の幹部たちが住むようなサンフランシスコで発言することが違うような候補者は労働者から評価されない、

と主張している。自分の体験談として語り始めたストーリーではあるが、そこから伝えようとしている教訓は、労働者という第 3 者の視点から述べている。この点から、第 3 者の語りを引用する例とスピーカー本人が体験談を語るストーリーとは政治スピーチの中では、共通点が多いことが分かる。

ストーリーの研究は言語学の他にも文学、社会学、心理学など多くの分野で研究が進んでいるが、本研究においては、社会言語学のなかで発展してきた枠組で分析を進める。Labov (1972) は、個人の体験談の構造の特徴を捉えた。体験談とは「話し手自身に起きた一連の出来事を時間の流れに沿って伝える形式」のことである(橋内 1999 p.142)。McCarthy (1991) は、Labov (1972) の分析の特徴を説明し、英語で語る体験談は少なくとも 6 つの部分を持ち、展開していると指摘している (p.138)。具体的には、(1)「導入部」でこれからどんな内容を語ろうとするかを述べる。(2)「舞台設定」で内容の本筋に入るまえに、場所・背景の設定を行う。(3)「展開」では、内容の本筋を述べる。(4)「結果」でその結末または解決を述べる。(5)「終結部」では、内容をまとめるか、教訓を導き出す。(6)「評価」で内容のヤマがあるときに、聞き手に訴えかけ、話の内容のどの段階でも挟み込むことができる。以上の 6 つの部分で成り立っているという(橋内 1999 pp.143-146)。ラボブのこの分析を施すと、ペイリン候補の個人のストーリーは次のように分析できるだろう。

例 1 : 個人のストーリー (ペイリン候補)

個人のストーリー (第 2 部)	
英語	和訳
<p>(1) 導入 I had the privilege of living most of my life in a small town.</p> <p>(2) 舞台設定 I was just your average hockey mom and signed up for the PTA. I love those hockey moms. You know, they say the difference between a hockey mom and a pit bull? Lipstick.</p> <p>(3) 展開 So I signed up for the PTA because I wanted to make my kids' public education even better. And when I ran for city council, I didn't need focus groups and voter profiles because I knew those voters, and I knew their families, too.</p> <p>(4) 結果 Before I became governor of the great state of Alaska I was mayor of my hometown. And since our opponents in this presidential election seem to look down on that experience, let me explain to them what the job involved. I guess -- I guess <u>a small-town mayor is sort of like a community organizer, except that you have actual responsibilities.</u> (教訓)</p> <p>(6) 評価 I might add that, in small towns, we don't quite know what to make of a candidate who lavishes praise on working people when they're listening and then talks about how bitterly they cling to their religion and guns when those people aren't listening.</p> <p>(6) 評価 No, we tend to prefer candidates who don't talk about us one way in Scranton and another way in San Francisco.</p>	<p>私は幸運にも、人生のほとんどを小さな町で暮らしてきた。</p> <p>私は、平均的なホッケーママで、PTAの活動に参加した。私はホッケーママ達が大好きである。彼女たちはホッケーママと闘牛士の違いは、口紅であるという。</p> <p>だから、私はPTAに参加することにした。子供たちの公立の教育を更に良くしたかったからだ。そして、市議会議員に立候補したときには、支援者や選挙人プロフィールは必要なかった。投票者達や家族をすでに知っていたからだ。</p> <p>偉大なアラスカ州の知事になる前には、地元の町の市長だった。この大統領選の対抗者たちがこの経験を見下しているようなので、それがどのような仕事か説明させてもらう。</p> <p>私がおもうには、小さな町の市長というのはコミュニティ・オーガナイザーのようなものである。そして、実際の責任もある。</p> <p>加えて言うと、小さな町では、労働者が聞いているところでは褒めそやすけれど、聞いていないところでは宗教や銃にしがみ付いているなどと悪くいう人を候補者にはしない。</p> <p>スクラントンのような町で言うことと、サンフランシスコで言うことが違う候補者の方を我々は好むのである。</p>

ペイリン候補は、(1)「導入」では、「I had the privilege of living」という表現を用いて、その主題である「人生のほとんどを小さい町で過ごしたこと」を導いている。その後、(2)「舞台設定」で「I was just your average hockey mom and signed up for the PTA」という表現を用いて、主題が自分のことであり、かつて自分が普通のホッケーママであったことを示している。(3)「展開」では、自分が市議会議員になり、政治の道を歩み始めたことを語っており、(4)「結果」では、現在のアラスカ州知事の地位に就いたことが語られている。この話の核であり、ペイリン候補が伝えたいのは、「a small-town mayor is sort of like a community organizer, except that you have actual responsibilities」の部分であり、これがこのストーリーの教訓である。つまり、小さい町で暮らすことは、共和党候補者達が馬鹿にするように悪いものではなく、小さい町には小さい町のルールがあり、市長はコミュニティのまとめ役であり、実際に町を運営する重責があることを伝えようとしている。(6)「評価」として、小さい町のルールに触れ、相手が聞いていようといまいと、同じことを述べる誠実さと経済的に困窮している場所と裕福な場所で言う内容を変えない品格の大事さをストーリーの語り手の評価として聴衆に伝えようとしている。

3.2 歴史のストーリー

政治演説の中ではよく、歴史上のストーリーが語られることがある。クリントン氏とペイリン氏という二人の女性政治家がどのように歴史上の物語を利用して、自分の主張を展開しているかを例2と例3で分析する。例2は、ペイリン候補のスピーチの第2部でトルーマン副大統領のストーリーを語る部分である。

トルーマンは、1884年にミズーリ州ラマーで生まれ、第二次世界大戦の終結時にアメリカ大統領に就任した人物である。彼は、高校を卒業し、銀行に就職した。その後、父親を助けるために就農したが、大学は卒業して

いない。第一次世界大戦での従軍経験や士官への昇格、戦後の州内での行政官経験ののち、1934年にミズーリ州の上院議員に選出された。1944年に大統領選が近づくと、副大統領候補として民主党大会で指名された。大統領候補のルーズベルトは高い評価を受け、4 期目ながら当選し、トルーマンはそれに伴って副大統領に就任した（“Harry S. Truman,” n. d.）。ペイリンのいう「異例の」というのは、この4 期目という異例さと、国政に関わりながら大学を卒業していない異例さ、農業従事者である異例さを指しているものと思われる。ここでペイリン候補は、自分の異例さをトルーマンの異例さに重ね、偉大な前例があることを訴えている。

例 2：歴史のストーリー（ペイリン候補）

スピーチ原稿（第 2 部）	
英語	和訳
<p>（１）導入 Long ago,</p> <p>（２）舞台設定 a young farmer and a haberdasher from Missouri, he followed an unlikely path -- he followed an unlikely path to the vice presidency.</p> <p>（５）終結部 And a writer observed, <u>"We grow good people in our small towns, with honesty and sincerity and dignity,"</u> and (教訓)</p> <p>（６）評価 I know just the kind of people that writer had in mind when he praised Harry Truman.</p>	<p>ずいぶん前に、</p> <p>ミズーリ出身の一人の農夫で小間物屋を営む若者がいて、彼は異例な道を辿った。彼は、副大統領への異例な道を辿ったのである。</p> <p>そして、ある作家の観察によると、「我々の小さい町では、善良な人々が育っていて、正直で誠実さと品格を持っている。」とのことだが、</p> <p>その作家がハリー・トルーマンを称賛したときに、私もちょうどその作家が考えているような人々を知っていると思った。</p>

<p>(6) 評価 I grew up with those people. They're the ones who do some of the hardest work in America, who grow our food, and run our factories, and fight our wars. They love their country in good times and bad, and they're always proud of America.</p>	<p>私はそのような人々と共に成長した。彼らはアメリカの一番厳しい仕事のある部分を担っている人々であり、作物を育て、工場を運営し、戦争で戦う。彼らは良い時も悪い時も彼らの国家を愛している。そして、彼らは常にアメリカを誇りに思っている。</p>
---	---

例 2 にラボブの提唱する 6 つの部分で分析を施すと、時間軸に沿った説明の部分である (3) 「展開」と (4) 「結果」がないことが分かる。ストーリーは、(1) 「導入」の「Long ago」という表現で突然、昔話が始まることを知らせている。(2) 「舞台設定」で、ミズーリ出身の人物の話であること、農夫であり小間物屋を営む人物で副大統領になった歴史上の人物であることが紹介される。その人物の詳細や話の展開は提供されず、「an unlikely path (異例の道筋)」というキーワードが出される。その後すぐに、(5) 「終結部」で教訓が示され、それが「小さい町では、正直で、誠実で、品格を持ったよい人間が育つ」という点であることが分かる。最後に、ペイリン候補がこのストーリーで伝えたいことが、(6) 「評価」の部分によって、歴史上の出来事の教訓と結びつけられる。つまり、例 2 のスピーチの「小さい町では、善良な人々が育っていて、正直で誠実さと品格を持っている」という教訓によって、異例な経歴を持つ人物が副大統領に当选するという点でトルーマンとペイリン候補が結びつくことになるのである。

例 3 は、クリントン候補のスピーチで用いられた歴史上のストーリーである。ここで、クリントン氏は、ハリエット・タブマンの「地下鉄道 (Underground Railroad)」の話を用いて、進み続けること (keep going) の大事さを物語っている。ハリエット・タブマンは、アメリカの歴史の中で

影響力のある女性の一人に選ばれるまでになっている（“ハリエット・タブマン,” n. d.）。アメリカ国務省の資料によると、タブマンの人生は、次のようなものであった。タブマンは、元々はメリーランド州ドーチェスター群で奴隷として1820年ごろ生まれたが、自力で逃亡し、ペンシルベニア州フィラデルフィアの「安全な場所」まで走って逃げおおせたことにより、奴隷制度から逃れることに成功したアフリカ系アメリカ人女性であった。1850年に逃亡奴隷法が成立し、脱走奴隷の支援が違法になったが、タブマンはそれでも諦めることなく、「地下鉄道（Underground Railroad）」を組織し、支援を継続した。地下鉄道とは言え、実際に物理的な鉄道を地下に建設した訳ではなく、賛同する人々を組織し、秘密裏に活動を組織化し、自由州へのルートの要所に支援する人員を隠れる場所を配置した。隠れる場所は、民家の屋根裏のこともあれば、教会の地下にある隠し部屋のこともあった。南北戦争に至るまでには300人の奴隷たちを「地下鉄道」に案内したという。また、「奴隷制度がある地域へ19回も危険な旅をした」という記録がある。タブマンは、その1回として、高齢の自分の両親を連れ出して、ニューヨーク州オーバーンへ連れて行ったこともあった。それ以降、オーバーンは、彼女の故郷にもなった。1860年には、アメリカ各地を講演のために訪れる旅によって、奴隷制度撤廃に加え、女性の権利についても啓蒙して回ったという記録が残っている（“ハリエット・タブマン,” n. d.）。

例 3 : 歴史のストーリー (クリントン候補)

歴史のストーリー (スピーチ原稿の第 5 部)	
英語	和訳
<p>(1)導入 This is the story of America. Of women and men who defy the odds and never give up. <u>How do we give this country back to them?</u> (質問)</p>	<p>これは、アメリカの話だ。困難に立ち向かい決して諦めなかった女性達と男性達の話である。</p>
<p>(2)舞台設定 <u>By following the example of a brave New Yorker, a woman who risked her life to shepherd slaves along the Underground Railroad.</u> (応答)</p>	<p>それは、勇敢なニュー Yorker であり、命をかけて奴隷達を地下鉄道に沿って導いた、ある一人の女性の例を辿ることによってである。</p>
<p>(6)評価 And on that path to freedom, Harriett Tubman had one piece of advice. If you hear the dogs, keep going. If you see the torches in the woods, keep going. If they're shouting after you, keep going. <u>Don't ever stop. Keep going.</u> (教訓)</p>	<p>そして、自由への道において、ハリエット・タブマンは、1 つの助言を持っていた。</p> <p>犬の鳴き声を聞いたら、進み続けよ。森の中に追手の松明の火を見たら、進み続けよ。追手の叫び声が聞こえたら、進み続けよ。</p> <p>決して立ち止まってはならない。進み続けるのだ。</p>
<p>(6)評価 If you want a taste of freedom, keep going. Even in the darkest of moments, ordinary Americans have found the faith to keep going.</p>	<p>もし、自由を味わいたいのであれば、進み続けなさい。 暗闇にいるような瞬間においても、普通のアメリカ人達は進み続けることを信じている。</p>
<p>(6)評価 I've seen it in you. I've seen it in our teachers and firefighters, nurses and police officers, small business owners and union workers, the men and women of our military - you always keep going.</p>	<p>それを私は皆さんのなかに見出している。教師、消防士、看護師、警察官、商店の経営者、労働組合の人々、陸軍の皆さんたちの中にそれを発見し続けてきた。皆さんは常に進み続けている。</p>
<p>(6)評価 We are Americans. We're not big on quitting.</p>	<p>我々はアメリカ人である。止めることをよしとしない。</p>
<p>(6)評価 But remember, before we can keep going, we have to get going by electing Barack Obama president.</p>	<p>しかし、覚えておいてほしい。我々が進み続ける前に、バラク・オバマを大統領に選出する必要があるのだ。</p>

ラボブの提唱する構成分析を施すと、時間軸に沿った説明の部分である（３）「展開」と（４）「結果」の部分がないことが分かる。ストーリーは、（１）「導入」でしっかり、新たなストーリーが始まることが伝えられる。まずは、「This is the story of America,」という表現で始まり、次に質問形式で「How do we give this country back to them?（どのようにこの国を取り戻すのか）」の答えとして、主人公のハリエット・タブマンの名前が紹介される。次の（２）「舞台設定」では、ニューヨーク出身の女性であること、奴隷制度に関連して、Underground Railroadというキーワードで時代が19世紀半ばに設定される。（６）「評価」で、教訓の部分によって歴史上の出来事と現在のスピーチの主張が結びついており、「決して諦めないことと進み続けることが大事である。」という教訓はハリエット・タブマンのストーリーと民主党が一致団結して進み続けること、という点で結びつくことになる。以上の通り、クリントン氏とペイリン氏の歴史ストーリーを見る限り、歴史ストーリーは著名なものが選ばれ、自分の主張の証拠として使われる様子がわかる。ストーリーは、キーワード（あるいは、キーフレーズ）とともに紹介される。例３のクリントン候補の例であれば、そのキーフレーズは「keep going（進み続けること）」であり、歴史上の人物であるタブマンが犬や追手に追いかけてながらも森や草原を駆け抜け、進み続け、遂には目的を達成したことになぞらえていることが分かる。

3.3 第三者のストーリー

第三者のストーリーはどのように語られるのだろうか。まずは、例４のペイリン候補の例から見ていこう。このストーリーは、ハノイで捕虜となった時の話である。証言者はマケインとともに捕虜に取られた人物である。

例４：第三者のストーリー（ペイリン候補）

スピーチ原稿（第２部）	
英語	和訳
<p>（１）導入 And it's a long way from the fear, and pain, and squalor of a six-by-four cell in Hanoi to the Oval Office.</p> <p>But if Senator McCain is elected president, that is the journey he will have made. It's the journey of an upright and honorable man, the kind of fellow whose name you will find on war memorials in small towns across this great country, only he was among those who came home.</p> <p>To the most powerful office on Earth, he would bring the compassion that comes from having once been powerless, the wisdom that comes even to the captives by the grace of God, the special confidence of those who have seen evil and have seen how evil is overcome. A fellow...</p> <p>（２）舞台設定 A fellow prisoner of war, a man named Tom Moe of Lancaster, Ohio...</p> <p>（３）展開 ... Tom Moe recalls looking through a pinhole in his cell door as Lieutenant Commander John McCain was led down the hallway by the guards, day after day.</p> <p>（４）結果 And the story is told, when McCain shuffled back from torturous interrogations, he would turn towards Moe's door, and he'd flash a grin and a thumbs up, as if to say, "We're going to pull through this."</p>	<p>ハノイの狭い牢獄での苦しみと恐れと痛みから大統領執務室へは長い道のりだった。</p> <p>しかし、マケイン上院議員が大統領に選ばれたら、それは彼が達成した道程である。真っ直ぐで誇りに思える男の道程である。全国の小さな町の戦没者記念碑に名前が載っているような人物の道のりである。ただ、彼の場合は、帰還兵の一人であった。</p> <p>地球上でもっとも権力のある執務室に、彼はかつて無力だったところから思いやりを持ち込んでくれるだろう。それは、神の恵による捕虜達に与えられた英智であり、邪悪なものを目にし、それをどのように克服できるかを体験した人間が持つことのできる、特別な自信である。</p> <p>ともに捕虜になった男性でオハイオ州のランカスターに住むトム・モウは、</p> <p>トム・モウは、自分の牢獄のドア穴から見ていた。ジョン・マケイン少佐が監視に連れられて廊下を歩いて行くのを。毎日毎日のことだ。</p> <p>そして、話によれば、拷問のような尋問から戻って来たときに、マケインはモウのドアに向かって微笑みを浮かべ、親指を立てた。あたかも「我々はこれ乗り越えるぞ」と言わんばかりだった。</p>

<p>(6) 評価 My fellow Americans, that is the kind of man America needs to see us through the next four years. For a season, a gifted speaker can inspire with his words. But for a lifetime, John McCain has inspired with his deeds.</p> <p>If character is the measure in this election, and hope the theme, and change the goal we share, then I ask you to join our cause. Join our cause and help America elect a great man as the next president of the United States.</p> <p>Thank you and God bless America.</p>	<p>国民のみなさん、これこそアメリカが次の 4 年間に必要としている人物だ。ある一時期、才能のあるスピーカーは言葉で我々を勇気づけてくれるかも知れない。でも、一生の間、ジョン・マケインは行動によって勇気づけてくれた。</p> <p>もし、人格がこの選挙の尺度で、テーマを希望し、我々が共有する目標を変えるのであれば、我々の大義に参加してほしい。我々の大義に参加して、アメリカが素晴らしい人物を合衆国の大統領として選ぶことを助けてほしい。</p> <p>ありがとう。アメリカに神の御加護があるように。</p>
--	--

Labov (1972) の構成分析を施すと、(1) 導入は、このストーリーの主人公である Tom Moe の直前にはなく、それまでに語られた一連のマケイン候補の捕虜生活の記述の中で行われている。そこでは、「And it's a long way from the fear, and pain, and squalor of a six-by-four cell in Hanoi to the Oval Office.」の表現の中の「ハノイの狭い牢獄での苦しみ」という表現によって、捕虜生活時代の話が始まることが示されている。その後、(2) 「舞台設定」は、99 単語後に始まる段落で示される。ここでは、名前と場所が設定され、登場人物は同じ時期にハノイで捕虜になっており、今ではオハイオ州に住んでいるアメリカ人男性のトム・モウである。(3) 「展開」では、具体的なストーリーが語られ、マケイン候補がいつも敵兵に連行されて、尋問を受けていたことが伝えられる。(4) 「結果」では、ある日、マケインがいつものとおり敵兵に連れられて牢獄に戻って来たとき、トム・モウの部屋のドアホールに向かって、親指を立てて「我々はこれを乗り切るぞ」というサインを送ったエピソードを伝えている。その後、(6) 「評価」として、ペイリン候補がこの話の結論を自分の評価として語っており、マケインこそこのような困難な状況でのリーダーに適している、と結論づけている。

例 4 のペイリン候補のスピーチの例のように、第三者のストーリーが引用されて、スピーチをする政治家の主張を代弁する例として使われる一方で、スピーカー個人の体験談の中に、第三者のストーリーが組み込まれ、複雑に構成されながらも効果的に語られることもある。

これはクリントン候補のスピーチの第 1 部で用いられている例で、オバマ大統領候補を当選させるために、民主党が団結し、クリントン候補の支持者もオバマ候補に投票すべきであると説得している場面である。そこで、自分がそもそも大統領選に立候補して達成しようとしたことや、どのような体験をしたか、特に、どのような有権者に会ったか、どのような問題を持った人々がいたかを体験談として語っている部分である。

ここでは、3 名の例が出ている。一人目はシングルマザーで、その母親は、自閉症を持つ二人の子供を養子として引き取って育てていたが、自分が癌であることが分かったという。彼女は、髪が抜けた自分の頭にヒラリー・クリントンの名前を書いて、クリントン候補に挨拶し、会った時には健康保険のために戦ってほしいと懇願したという。二人目は、海兵隊の Tシャツを着た若い男性であり、治療を何ヶ月も待っていて、自分の仲間達が医療保険で守られるように懇願し、自分もそれを望んでいると言ったと語っている。三人目は、最低賃金で働いている母親で、最近、雇用主から労働時間を減らされたので、その母親の子供は自分の家族が今後、どうなるかわからないと語ったという。このように、彼女の体験談として始まったストーリーだが、3 名の一般のアメリカ国民の言葉でブッシュ政権の問題点を指摘しているという機能を果たしていることが分かる。

例 5 : 第三者のストーリー (クリントン候補)

スピーチ原稿 (第 1 部)	
英語	和訳
<p>(A) 導入 For me, it's been a privilege to meet you in your homes, your workplaces, and your communities.</p> <p><u>Your stories reminded me every day that America's greatness is bound up in the lives of the American people</u> (教訓)</p> <p>- your hard work, your devotion to duty, your love for your children and your determination to keep going, often in the face of enormous obstacles.</p> <p>You taught me so much, you made me laugh, and ... you even made me cry. You allowed me to become part of your lives. And you became part of mine.</p> <p><ストーリー 1 : シングルマザー></p> <p>(1) 導入 I will always remember</p> <p>(2) 舞台設定 the single mom who had adopted two kids with autism,</p> <p>(3) 展開 didn't have health insurance and discovered she had cancer.</p> <p>(4) 結果 But she greeted me with her bald head painted with my name on it and asked me to fight for healthcare.</p>	<p>私にとって皆さんにお会いするのはとても光栄なことであった。自宅で、職場で、コミュニティで、お会いした。</p> <p>皆さんのストーリーは、アメリカの偉大さがアメリカ国民の生活と結びついていることを毎日思い起こさせてくれた。</p> <p>皆さんの勤勉さ、任務に忠実なこと、子供への愛、進み続けることへの決意は往々にして、膨大な障害に阻まれる。</p> <p>皆さんは私に多くのことを教えてくれたし、笑わせてくれたし、泣かせてくれた。皆さんは私を生活の一部に入れてくれたし、皆さんは私の生活の一部になった。</p> <p>私はあのシングルマザーのことを忘れないだろう。彼女は、自閉症の二人の子供を養子にしたが、その後、自分が癌であることを知った。彼女は、髪が抜けたつるつるの頭に私の名前を書いて、私に挨拶しに来てくれた。健康保険のために戦ってほしいと言っていた。</p>

<p><ストーリー2：海兵隊Tシャツの男></p> <p>(1) 導入 I will always remember</p> <p>(2) 舞台設定 the young man in a Marine Corps t-shirt</p> <p>(3) 展開 who waited months for medical care and</p> <p>(4) 結果 said to me: "Take care of my buddies; a lot of them are still over there ... and then will you please help take care of me?"</p> <p><ストーリー 3：少年></p> <p>(1) 導入 I will always remember</p> <p>(2) 舞台設定 the boy who told me his mom worked for the minimum wage</p> <p>(3) 展開 and that her employer had cut her hours.</p> <p>(4) 結果 He said he just didn't know what his family was going to do.</p> <p>I will always be grateful to everyone from all 10 states, Puerto Rico and the territories, who joined our campaign on behalf of all those people left out and left behind by the Bush administration.</p>	<p>海兵隊のTシャツを着た若い男性のことも決して忘れない。彼は治療を何ヶ月も待っていて「仲間のことをよろしく頼む。多くの仲間はまだ戦地にいるんだ。」と言った。そして、「そのあとで、自分のことも面倒みてほしい」と言った。</p> <p>あの少年のことも忘れない。その子は、自分の母親が最低賃金で働いていたと言った。そして、雇用主から労働時間を減らされてしまい、彼は、自分の家族が今後どうなるかわからないと途方に暮れていた。</p> <p>10州、プエルトリコ、諸島から参加してくれたすべての人々に感謝する。皆さんは、プッシュ政権によって除外され、取り残された人々のために、われわれの選挙運動に協力してくれた。</p>
--	--

Labov (1972) の構成分析を施すと、クリントン候補の個人ストーリーの導入部分が (A) であり、そのストーリーの中に第三者のストーリーが 3 つ組み込まれていることが分かる。(A)「導入」では、「For me, it's been a privilege to meet you in your homes, your workplaces, and your communities.」という表現によって導入され、クリントン候補がこれから自分が選挙戦で国内各地を回る中で体験したことを話そうとしているサインとなっていることが分かる。そして、その直後に教訓 (例 5 の下線部) が語られる。これこそ、クリントン候補の主張とこれから語られようとする

る第三者のストーリーの教訓が重なる部分である。教訓の内容は「アメリカの偉大さがアメリカ国民の生活と結びついていること」である。その例として、次の 3 つの事例が紹介される。

第三者のストーリー 1 は、(1)「導入」として、「I will always remember (私はいつも思い出すだろう)」という表現で始まり、その後に続く(2)「舞台設定」は、登場人物がシングルマザーで、彼女は自閉症の子供を二人養子として引き取っている。(3)「展開」で、彼女に癌が進行していることが語られる。(4)「結果」で、不幸のどん底にいる彼女は、癌の治療のために髪が抜け落ちた頭に「ヒラリー」という候補者の名前を書いて、クリントン候補を出迎えたということが伝えられる。そんなユーモアのある彼女であるが、そんな彼女が言ったのが、医療保険制度を確立するために戦ってほしい、ということだった。

ストーリー 2 では、(1)「導入」として、ストーリーとともに、「I will always remember」という表現が用いられ、その後に続く情報が登場人物の説明になっている。(2)「舞台設定」の人物は、海兵隊のTシャツを着た若い男性で、(3)「展開」で、何ヶ月も治療の機会を待っていることが語られる。(4)「結果」では、その男性がまずは自分の仲間の治療を優先し、次に自分にも援助を求めた、というストーリーになっている。

ストーリー 3 では、(1)「導入」で、同じく、「I will always remember」という表現が用いられ、ストーリー 1 と 2 と形が整っていることが分かる。その後、(2)「舞台設定」では、少年のことが紹介され、その子は、自分の母親が最低賃金で働いていたと言った。そして、(3)「展開」で、その母親は雇用主から労働時間を減らされてしまった情報が伝えられる。(4)「結果」で、その少年が自分の家族が今後どうなるかわからないと途方に暮れていた、というストーリーになる。

以上の 3 つのストーリーは簡潔に、同じ表現を使って語られ、手際もよい。この 3 つのストーリーから導き出される教訓もストーリーの早い

段階で簡潔に語られ、要点も分かりやすい。このように、クリントン候補は、3つの第三者のストーリーを自分の体験談に折り込みながら、複雑で奥の深いストーリーを展開している様子が分かる。

これまで、例1から例5までについて、体験の直接性の度合いを軸として3つに区分し、個人のストーリー、歴史のストーリー、第三者のストーリーに分けて、その特徴をラボブの6つの構造のカテゴリーを用いて分析し、論じてきた。その結果、個人のストーリーが自分の体験談として語られるときは、概ね、ラボブの6つの構成に沿って、話の展開が語られることがわかった。しかしながら、歴史のストーリーを語る際には、(2) 舞台設定が歴史上の人物名と出来事のキーワードで手短かに設定された後には、そのストーリーの中で得べき教訓が直後に語られ、ストーリーの筋は詳しく語られぬままに、語り手の(6) 評価として、主張が述べられ、まとめあげられる様子が観察された。また、主人公が語り手とは違う第三者の場合のストーリーは、歴史のストーリーとは違い、(2) 舞台設定で人物と状況が特定された後には、(3) 展開においてストーリーが進み、(4) 結果において、話の着地点が語られたあと、(6) 評価として、語り手の主張とストーリーの共通点が述べられて、話がまとめあげられる様子が明らかになった。これは、ペイリン候補の例4のように1つのストーリーがシンプルに語られることもあれば、クリントン候補の例5のように3つのストーリーが語り手のストーリーの中に織り込まれて、演説の形として作りあげられる様子も明らかになった。

また、最後に、個人差も見えてとれた。ペイリン候補は、全国区の選挙において初心者のためか、スピーチの構成がシンプルであり、ストーリーの語りの様子も単調である様子が窺われた。一方、クリントン候補は、歴史のストーリーの語りにおいても、第三者のストーリーを織り込む様子を見ても、その語りのスキルが高度で、計算尽くされており、演説が巧みに構成されている様子が見てとれた。

4.0 おわりに

本研究は、2008年アメリカ大統領選挙の候補者たちのスピーチを分析対象とし、そのスピーチの中で語られるストーリーに注目し、どのように構成されるか、またどのような特徴があるかについて分析した。具体的には、民主党の大統領候補のヒラリー・クリントン氏と共和党の副大統領候補のサラ・ペイリン氏の党大会の演説を分析対象とした。分析においては、社会言語学者ラボブ（1972）の構成・機能分析を用いた。結果として、ストーリーには3種類（個人の体験談のストーリー、歴史のストーリー、第三者のストーリー）あることが判明した。個人の体験談のストーリーは、ラボブの6構成のそれぞれが時系列で語られる様子が見て取れたものの、歴史のストーリーは、舞台設定は人物名と場所名で簡潔に明示されたあと、ストーリーの詳細は語られずに、語り手はストーリーの評価をしながら、主張を語る様子が見て取れた。第三者のストーリーは政治演説においては、主に、一般国民の体験であることが多く、政治家が国民の体験を自分の主張に織り交ぜながら、ストーリーを語っている様子が見てとれた。

本分析で興味深かったのは、同じ政治家とはいえ、クリントン氏とペイリン氏ではストーリーの語り方に違いがあった点である。クリントン候補のストーリーの語りは、構造が複雑で、一つの主張の中に複数の第三者のストーリーが内包されており、巧みに構成され、演説が展開されている様子が明らかになった。クリントン候補の演説は、歴史のストーリーにおいても、第三者のストーリーの語りにおいても、複雑で慎重に計画されて、効果を挙げていたのに対し、ペイリン氏の演説はどちらのケースもシンプルであった。しかしながら、両氏の演説を比較分析したとはいえ、一件ずつの比較であるので、結論とするには時期早尚である。本研究において、政治演説で利用されるストーリーの種類がある程度特定されたので、今後の研究においては、さらに同じスピーカーの他のスピーチにも広げて特徴を緻密に捉えていく必要があるだろう。

本稿は、アメリカ大統領選の候補者達のスピーチの中で語られるストーリーに注目し、その特徴を明らかにすることを目的としたが、今後は、2008年の大統領選にとどまらず、その後の選挙においての民主党と共和党のそれぞれの候補者達のスピーチにも分析対象を広げ、党による特徴の違いや時代の流れによる特徴の違い等についても分析する必要がある。引き続き、このような研究の継続が必要であろう。

参考文献

ハリエット・タブマン (n.d.) 国務省出版物:「女性実力者の系譜－奴隷制度の鎖を断ち切る (About the USA: Women of Influence)」アメリカンセンター
<https://americancenterjapan.com/wp/wpcontent/uploads/2015/11/wwwf-pub-women.pdf> (2021年12月 3 日閲覧)

de Fina, A. D.Schiffrin, and M.Bamberg. 2006. *Discourse and Identity*. Cambridge University Press.

Harry S. Truman (n.d.) *A Resource Guide*, Library of Congress.
<https://www.loc.gov/rr/program/bib/presidents/truman/index.htm>
 (2021年12月 1 日閲覧)

橋内武 1999『ディスコース』くろしお出版

上岡伸雄 (編著) 2006『名演説で学ぶアメリカの歴史』 研究社

上岡伸雄 (編著) 2010『名演説で学ぶアメリカの文化と社会』 研究社

Labov, W. 1972 *Language in Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

McCarthy, M. 1991 *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge University Press.

Widdowson, H.G. 2007. *Discourse Analysis*. Oxford University Press.

ヒラリー・クリントンのスピーチ

<https://www.theguardian.com/world/2008/aug/27/uselections2008.hillaryclinton> (原稿)

<https://www.youtube.com/watch?v=MeFMZ7fpGHY> (動画)

サラ・ペイリンのスピーチ

<https://edition.cnn.com/2008/POLITICS/09/03/palin.transcript/index.html> (原稿)

<https://www.youtube.com/watch?v=0MwAHP0jssY> (動画)